

『播州皿屋舗』と短編合卷

要 旨

本稿は、浄瑠璃『播州皿屋舗』（為永太郎兵衛・浅田一鳥作、寛保元年「二七四」七月初演）などの〈皿屋敷もの〉に依拠する短編合卷を対象に、青山鉄山の人物造型を中心とした比較研究をおこなうものである。取り扱う作品は、『播州皿屋敷物語』（山東京伝作、文化八年「一八一」刊）、『十人揃皿之訳続』（小枝繁作、同九年「一八二」刊）、『皿屋敷浮名染著』（曲亭馬琴作、同十一年「二八一四」刊）の三作で、〈皿屋敷もの〉の利用方法の違いが、青山鉄山の人物造型にも影響を及ぼしていることが確認できた。

キーワード 浄瑠璃 合卷 皿屋敷 人物造型 趣向

はじめに

筆者はこれまで、世話浄瑠璃を共通の典拠とする京伝・馬琴の著作を対象に、その利用方法の検討を通して、登場人物に対する評価を考察してきたが、そこから浮かび上がってきた両者の相違点として注目すべきは、善人・悪人の描写方法である。

大屋多詠子^②によれば、馬琴は読本諸作において、「御家騒動の手法を借りながらも、主家における忠臣悪臣の二項対立を提示せず、敵役を矮小化した」うえで、「浄瑠璃には見られない主人公らの肉親を創出し、その悪行を端緒とした因果で物語を構成した」という。このことは、合卷『敵討賽八丈』^③（文化六年刊）や、読本『糸桜春蝶奇縁』^④（同九年刊）、『美濃旧衣八丈綺談』^⑤（同十一年刊）にも当てはまる。一方、浄瑠璃の善男善女については、馬琴流の貞操観・因果応報観に基づいた改変が施されている。例えば、『敵討賽八丈』のお妻・才三郎は、

中 尾 和 昇

不義を犯す男女から貞節を堅く守る男女へと変化している。このことは、『糸桜春蝶奇縁』の小糸・佐七についても同様である。

対して京伝の作品はどうだろうか。まず浄瑠璃の敵役に関しては、御家横領などの陰謀を企てる人物へと格上げされており、「矮小化」する方向の馬琴とは真逆である。例えば、合巻『今昔八丈揃』(文化九年刊)では、悪臣秋月一角が序盤で殺されてしまうことを問題視し、彼を御家横領や管領討滅といった陰謀を企てる人物とすることによって、御家騒動物としての筋の弱さを補強している。また、悪人に悪行を悔い改めさせることもある。同じく『今昔八丈揃』に登場する鰐鰯の才三坊は、金屋金五郎という侠客の弟として登場し、己の悪行を悔いて自害する結末となる。これは、浄瑠璃・歌舞伎の演出法の一つである「もどり」を取り入れたものである。馬琴も「もどり」を自家薬籠中のものとしていたことが知られるが、浄瑠璃の敵役が善心に立ち戻ることはなかった。一方、浄瑠璃の善男善女について言えば、本来の役割から大きく変化していることがわかる。例えば、合巻『糸桜本町文粹』(同年刊)においては、綱五郎と左七、花咲とお房を、それぞれ同一人物とすることにより、役割の一部が相互に交換されることとなった。逆に『今昔八丈揃』においては、性質の異なる二人のお駒を登場させている。馬琴合巻においても男女の性別を逆転させることはあるが、原作の設定そのものを改変することはない。

以上の点を踏まえ、あらためて京伝・馬琴の演劇利用について考えたい。そこで本稿では、浄瑠璃『播州皿屋舗』(為永太郎兵衛・浅田

一鳥、寛保元年七月初演)などの、(皿屋敷もの)に依拠する短編合巻を取り上げ、敵役である青山鉄山の人物造形を中心とした比較研究をおこなう。対象作品は、『播州皿屋敷物語』(山東京伝、文化八年刊)、『十人揃皿之訳続』(小枝繁、同九年刊)、『皿屋敷浮名染著』(曲亭馬琴、同十一年刊)の三作。今回、京伝・馬琴に加えて小枝繁の作品を検討対象に加えるのには理由がある。後述するように、小枝繁は京伝・馬琴から読本の著述方法を学んだとされるが、合巻についてはこれまで検討されてこなかった。共通する題材を用いた短編合巻の比較研究を通して、三者の著述姿勢の一端を明らかにできるのではと考える。

一 『播州皿屋舗』について

まずは『播州皿屋舗』の概要について、簡単に整理しておく。本作は、皿屋敷の巷説を、播州姫路の細川家を揺るがせた唐絵の皿をめぐる御家騒動にからませたもので、(皿屋敷もの)の代表作として知られる。諏訪春雄(注7)によれば、『播州皿屋舗』は享保五年六月に京都の柿山四郎十郎座で上演された歌舞伎『播州評判錦皿九枚館』を先蹤とし、同年八月に大坂金子吉左衛門座で上演された『皿屋敷』の系統下に生まれたものだという。少々長くなるが、梗概を以下に記す。細川巴之介は足利義政の勘気を受け、妻衾の前(山名宗全娘)の家来園右衛門とともに嵯峨に隠棲するが、冷光院(義政母)の命によって帰国。宗全は弥太七が献上した唐絵の皿を受け取る。宗全は御家横

領を企てる。証の前は喜代若（巴之助・玉の井の息子）を園右衛門に預ける。宗全は皿を披露するが、執権青山忠太は贋物だとして割る。舟瀬三平（巴之介家臣）が皿の入った箱を持って登場するが中身はなく、三太夫（三平父）の鬻體と手紙が入っていた。手紙には、皿が出石平馬に盗まれたこと、三太夫が落度によって自害したことが書かれていた。冷光院は三平と腰元お菊を夫婦にし、皿を探すよう命じる。竹原藤内（宗全家臣）が楽焼屋を訪れ、弥五兵衛を連れ出す。そこに三平夫婦が訪れる。お菊は弥五兵衛の義娘。帰宅した弥五兵衛は、宗全に本物の皿を渡す約束をしてきたと言う。彼が出石平馬だと知った三平夫婦は、母から夫を殺すように勧められる（夫の身替りになるつもり）。察知した弥五兵衛は、三平に弓矢で射られた後、罪を告白するとともに、弥太七が皿を盗み取ったことを告げる。三平夫婦は弥太七を追う。【上之巻】

嶋原の揚屋を三平夫婦が訪れる。園右衛門が刀を売って皿を取り戻す計画を話すと、お菊は身替りを決意。皿を取り戻した三平はそれを預かって出立。園右衛門宅では、紅松（安宅・おやくの息子）を喜代若と考えた弥太七がやって来る。お花（園右衛門妻）は暗闇の中、弥太七と思って紅松を斬る。弥太七は園右衛門に斬られる。おやくは紅松の首を身替りとして藤内に差し出す。【中之巻】

家老青山鉄山は、細川家の忠臣と思いきや、巴之介の毒殺を企て、家来の蟻介に毒薬を飲ませて殺害、その毒薬を泉水へ流そうとする所に、皿を持ったお菊が来る。陰謀発覚を恐れた鉄山は、十枚のうち一

枚を素早く抜き取り、懷に隠したうえで、お菊に濡衣を着せて斬殺、死骸を井戸に捨てて。すると、お菊の皿を数える声が聞こえてくる。駆けつけた三平は一枚を取り戻し、逃げる鉄山を追い詰め、その首を打ち取る。その後、宗全は捕らえられる。【下之巻】

上之巻は「冷光院御所の段」「楽焼屋の段」を中心に展開する。序盤の「冷光院御所の段」では、御家騒動物でお馴染みの家宝紛失が描かれるが、そこには宗全による細川家横領の陰謀が深く関わってくる。これは、のちに応仁の乱へと発展する山名氏と細川氏の対立を、作品世界の枠組として構成していることを意味する。「楽焼屋の段」では、お菊の父弥五兵衛が、皿を盗んだ犯人であり、三平の父三太夫を死に追いやった出石平馬であることがわかる。ここでは、「親と夫の中に立。かゝる憂目に逢事は宿世いかなる報ぞ」とあるように、お菊が親子・夫婦の義理に苦悩するさまが一つの見せ場となっている。

中之巻に移り、「嶋原揚屋の段」では、質屋に売られた皿の代金を工面すべく、遊女となったお菊の苦労が描かれる。梗概には記さなかったが、巴之介がお菊に濡れかかり、それを三平らにたしなめられた部分があり、歌舞伎『傾城浅間嶽』（元禄十一年正月初演）二幕目で浅間巴之丞が遊女三浦に恋慕するも、三浦の夫である忠臣和田右衛門に草履で散々に打擲される場面を取り入れているという（注8 解題）。「園右衛門住居の段」では、紅松が誤殺され、その首を喜代若の代用とする「身替り」の趣向が用いられている。

下之巻は、多くの（皿屋敷もの）に共通する、鉄山によるお菊殺し

と、幽霊となったお菊の皿数えを描いた「青山下屋形の段」を見どころとする。鉄山は当初、細川家の忠臣として描かれていたが、この場面ですべて本性をあらわし、御家横領を企てる悪役と化す。また、最後の「青山隠れ家の段」において、「山名宗全も都にて謀反願たれば。云合て此所に楯籠」とあるため、両者は密かに同盟を結んでいたようである。

これらの点を踏まえたうえで、以下、合巻三作の検討に入ることとする。なお〈皿屋敷もの〉には、本作と同じく播州姫路を舞台とするもののほかに、江戸番町の旗本屋敷を舞台とするものがある。「番町皿屋敷」と呼ばれる一群で、実録『皿屋敷辨疑録』(馬場文耕、宝暦八年序)を嚆矢とし、歌舞伎『女夫星逢夜小町』(金井三笑、明和二年七月初演)などの江戸歌舞伎を経て、戯曲『番町皿屋敷』(岡本綺堂、大正五年二月初演)へと流入していく(注7森山論文)。

二 山東京伝『播州皿屋敷物語』

山東京伝の合巻『播州皿屋敷物語』(以下、『皿屋敷物語』)は、文化八年に丸屋文右衛門から刊行された作品で、前後編計三十丁から成る。序文に「文化七年庚午六月稿成」⁽⁹⁾とあることから、前年六月には脱稿していたようである。越智治雄(注7)が指摘するように、本作は『播州皿屋敷』のプロットを下敷きにしたことが知られている。ただ、棚橋正博(注9解題)によれば、同五年七月に江戸市村座上で

演された歌舞伎『皿屋敷』に触発されて構想を練ったとされる。また、前編末からは女伊達として名高い「奴の小三」⁽¹⁰⁾を登場させ、浄瑠璃『花系図都鑑』(近松半二ほか、宝暦十二年三月初演)を取り入れた、後編前半の場面を中心に活躍させる。なお、「おきく」が「おりく」となっているのは、徳川家斉の六男菊千代の名を憚ったことだが、〈皿屋敷もの〉の歌舞伎である『彩人御伽草』(四世鶴屋南北、文化五年閏六月初演)にも「おりく」⁽¹²⁾の名が見えることから、これらを意識した命名であろう。

京伝が合巻諸作において、敵役による御家横領の陰謀を前面に押し出す傾向にあることは、冒頭で述べた通りである。結論から先に述べれば、本作でも同様の現象が見られる。『播州皿屋敷』と同じく、佐保鹿家横領の首謀者は浜名人道である。このことは、閨九郎に皿の持参を命じる場面で、「かの皿を我が手に入るれば、雲井之介を罪に落とし、我が年来の望み、播州を横領せん事、瞬くうち也」(6ウ7オ)と語ることからも窺える。ただ、浜名人道が物語に関与するのは序盤のみで、最後に雲井之介に討たれるまでまったく登場しない。これは原作と同様の設定と言える。一方で、〈皿屋敷もの〉の中心的な敵役である青山鉄山には、従来にはない設定が付加されている。

物語序盤、執権久米山鉄山が雲井之介の廊通いを制止すべく、遊女高窓を身請けするよう勧め、同家中の高岡三輪右衛門もこれに賛同するという場面がある。原作の鉄山も、玉の井が岸兵衛(遊女屋の主人)から借りた金五十両を肩代わりしているため、両者は類似した設定と

いえる。ここには、先ほど述べたように、終盤で明らかになる鉄山の本性を強調するねらいがある。そして、その本性にこそ、原作との相違がみられる。すなわち、弟の怪蔵から「三足五色の尾長の蝦蟇」を受け取る場面において、鉄山は自身の素性と野望を語るのである。

我々が父といふは、佐上入道高時の末孫、法華山の袈裟太郎といつし人なるが、先年雲井之介が父、佐保鹿百合之介がために滅びたれば、此佐保鹿の家は父の仇なり。それ故に我、この久米山の養子となり、だん／＼立身して執権職となつたるも……時節を窺ひ、雲井之助を亡き者とし、父の仇を報ひて佐保鹿の家を横領せんと、我かねての巧みなり（22ウ23オ～24ウ25オ）。

傍線で示した通り、鉄山は父を殺された私怨から、御家横領を企てるに至ったのである。原作の鉄山も「將軍家の御意に入。主人の家を押領せん事掌の内に有」と語っているが、その真意は描かれていなかった。この時期の京伝合巻は、水野稔が「滅亡した者の遺族残党の復讐心とか、超自然的存在の呪詛とかが二重三重にからんだ、きわめて大掛かりのものとなって来ている」と指摘するような傾向にあり、鉄山の人物造型も同様の手法に基づいたものと言えるだろう。

また、原作と同様、鉄山は雲井之介の毒殺を企てるのだが、その毒薬は怪蔵が調達してきた「尾長の蝦蟇」に「酉の日酉の月酉の日出生の女の血潮」（24ウ25オ）を混ぜると出来上がるという。鉄山はおりが「酉の年月に当たる女」（同）であることを知っており、血を得るために彼女を殺害したのである。原作では自身の陰謀を盗み聞きさ

れたことによる衝動的な殺人であったが、本作では周到に計画されたものとなっている。このことも、鉄山の人物造型に大きく関係している。なお、十二支の一つが揃った年月日に生まれた女性を殺して生血を得るとするのは、『彩入御伽草』四建目「界川辻堂の場」で、浅山鉄山が義政調伏に必要な巳の年月日が揃った幸崎の血を得ようと、十本の指を一本ずつ切り落とすという趣向を取り入れたものであろう。

浜名入道、久米山鉄山と同じ敵役として登場するのが、錦手の土作の息子闇九郎である。闇九郎の役割は、本物の皿を盗み、偽物を浜名入道に献上して大金を得るという点において原作と共通しているが、息子の不埒を嘆く土作が「先達て女房を持たせ帷子が辻へ別宅させ、男の子まで出来たれど、その子が三つの時、女房に付けて追出し、その女房子は行方知れず」（9ウ10オ）と語るように、養うべき妻子がいるという設定が付加されている。原作にはないこの設定は、『花系図都鑑』第八「面打の段」を取り入れた後編前半に生かされている。

清水の面打元興寺赤右衛門は、女の面を店先に掛けて看板にしている。ある日、小三が蟬太郎を連れて清水に参詣すると、蟬太郎は店先に掛けられた女の面が亡母に似ていると言つて欲しがる。赤右衛門は蟬太郎に面と短刀を与える。小三は、短刀が殺害現場に残されていた鞘に収まるため、赤右衛門を犯人と思って乗り込む。そこに雲井之介があらわれ、「高窓の敵」と言つて赤右衛門に切りかかるや、死んだはずの高窓が姿を見せる。赤右衛門は旧臣飾磨の舘蔵で、三輪右衛門から頼まれ、袖乞いとなった小三の姉を殺し、高窓の身替りとしたの

であった。そこに、縁の下で事情を聞いていた闇九郎があらわれるのだが、彼は亡くなった袖乞の女の夫であり、蟬太郎の父であった。小三から難詰された闇九郎は、「赤右衛門殿の忠義の心を感心して、これまでの悪心を翻し、善になりたる懺悔話。…これ皆、俺がこれまで作りし悪事の報ひにて、巡る因果の道理也」(20ウゝ21オ)と語る。悪行を悔いて善心に立ち戻る闇九郎に、「もどり」が用いられていることは明白で、先述した『今昔八丈揃』と共通する京伝合巻の特色と言えるだろう。また、「闇九郎」という名前は、同書に登場する半時黒兵衛の前名「闇の黒平」と類似しており、御家の重宝を盗んだ悪人という点においても共通している。

ただ、この改変を京伝一人の手柄とするのは早計である。というのも、闇九郎の改心には前例があり、それが浮世草子『阿漕浦三巴』(延享二年刊)の弥太七である。『阿漕浦三巴』は『播州皿屋舗』と『田村麿鈴鹿合戦』(為永三郎兵衛・浅田一鳥、寛保元年九月初演)を綯い交ぜにした作品。従来は多田南嶺作とされていたが、高橋明彦によつて否定され、それが定説となっている。『播州皿屋舗』との関連については、八坂祐子¹⁸⁾が、御家騒動という観点から詳細な比較をおこなっている。八坂によれば、両者を結び付ける役割を持つのが弥太七であり、その結節点となるのが巻四の一で描かれる彼の改心だという。弥太七は山木家の横領を企む荒川伊達右衛門より唐絵の皿の偽物を作ることを命じられ、義母の妙閑に秘伝を尋ねに来るが、自身が山木家の忠臣出石平馬の息子であること、お菊が実の妹であることなどを

知り、己の悪行を悔いて巴之介に忠誠を誓う。

母妙閑弥五郎の御一言。心根に徹して忝し。今より善心に立帰り。主君に忠義を尽し。此身の垢を洗ひ落して。実父出石平馬が素性をあらはし。養父五兵衛殿の厚恩を報じ申さん。¹⁹⁾

人物設定に違いはあれど、同様の展開であることは明らかである。また、巻四の二および巻四の三で弥太七は「平蜘蛛の次郎蔵」という名で乙若(山木判官・当麻御前の息子)と邂逅するが、『皿屋敷物語』にも別人ながら「ひらた蜘蛛の毒八」という類似した名前の人物(浜名人道家来)が登場する。これらを総合すると、『皿屋敷物語』における闇九郎の改心は、本作を踏まえたものと見てよいだろう。なお、名前の一部である「毒八」は、『田村麿鈴鹿合戦』に登場する「平瓦次郎蔵」の仲間「二見の磯八」から採っている可能性も考えられる。

以上の検討から明らかのように、久米山鉄山と闇九郎に原作との相違がみられ、いずれも京伝合巻に共通する手法に基づく改変であった。とりわけ闇九郎に関しては、『阿漕浦三巴』の弥太七を踏まえるという徹底ぶりであった。その一方で、善人側の人物に大きな性質の変化は見られなかった。その意図は不明とせざるを得ないが、世話浄瑠璃を典拠とする場合とは事情が異なるのかもしれない。ただ一点、興味深いのは、雲井之介が許婚の鶯姫を正妻としつつ、遊女である高窓を妾としたことである。よく知られていることだが、京伝自身、遊女を妻としており、そのような婚姻には寛容的であった。一方、馬琴は遊女との婚姻を不貞としており、読本『夢想兵衛胡蝶物語』前編卷之三

「色欲国^{下中品}」（文化七年刊）でも、「全体夫の為なりとも、既に夥の客に身を汚して、年季が明たらば、又旧の夫とひとつにならふと思ひしは、欲から出た了簡ちがひにて、女の心操を正くする、道理をしらぬ悞⁽²⁰⁾なり」と強調している。ただ、彼自身、読本『三七全伝南柯夢』（文化五年刊）において、三勝・園花を半七の妻妾としていることから、重婚自体はそれほど問題としていなかったようである。

三 小枝繁「十人揃皿之訳続」

小枝繁の合巻『十人揃皿之訳続』（以下、『皿之訳続』）は、文化九年に西村屋与八から刊行された作品で、前後編全三十丁から成る。小枝繁といえ、当時複数のジャンルにまたがった作品を著す戯作者が多かったなかで、そのほとんどを読本に集中したことで知られる。今回取り上げる『皿之訳続』も、唯一の合巻作品である。小枝繁は文化二年刊の『絵本東嫩錦』以降、多数の読本作品を執筆しているが、その評価は「山東京伝・曲亭馬琴の作法に追隨した垂流の読本作者」という位置付けであった。第二作目の『絵本壁落穂』（文化三、五年刊）以降は、浄瑠璃や長編仏教説話に依拠する作品の執筆を経て、所謂〈史伝もの〉の制作に到達したとされ、それは馬琴の読本著述の軌跡を辿るかのごとくである。横山邦治が「一層忠実な馬琴路線の実践者」と評価する所以である。ところが近年、田中則雄の一連の研究により、京伝・馬琴とは異なる独自の作風が見出されつつある。とくに浄瑠璃

との関係については、「先ずは演劇作品と向き合って読み込み、特色を把握し、それを活かしながら読本の構造の中へと取り込もうとした」（注23）「小枝繁演劇依拠読本の諸相」と捉えている。

結論から先に述べれば、本作は『播州皿屋舗』を直接の典拠としておらず、他の〈皿屋敷もの〉作品に基づいて著述されたものと思われる。序文で「舶来の小説と本邦の古き物語とを混じて一篇の稗史を綴れり」と記すうちの、「本邦の古き物語」がそれに該当するのであろう。登場人物や内容から鑑みて、本作が依拠した〈皿屋敷もの〉作品としては、『播陽万宝智恵袋』（荷木堂、宝暦十年成）、歌舞伎『けいせい鏡台山』（桜田治助、文化二年七月初演）、黄表紙『酬冠播州皿屋敷』（徳永素秋、享和三年刊）などが挙げられる。加えて、『皿屋敷物語』からの影響も垣間見える。以上を踏まえたうえで、本章では青山鉄山に該当する佐下部弾正の人物造型を中心に考察する。なお、序文に記された「舶来の小説」は、鈴木重三（注11）によれば、中国白話小説『今古奇観』巻十六「李汧公窮邸遇俠客」を指すという。この点については後述する。

赤松則政は、足利義政に「十種香の皿」を献上することになったが、応仁の乱の兵火で十枚のうちの一枚が割れてしまっている。それを承けて執権於佐下部弾正は、則政に皿の焼き直しを提案する。則政は執権姫路左近の反対を聞き入れず、この提案を了承する。ところが焼物師の陶六によれば、同じ色を出すには「腹籠りの子の血」を釉薬に混ぜる必要があるという。陶六は弾正から十両を受け取り、娘おさく

の諫めも聞かず、身重の女順礼を殺害して胎内の子から血を搾り取る
が、血を入れた壺から陰火が燃えあがる。陶六は恐れることなく皿を
作り上げて赤松家に献上、褒美としておさくの奉公を許される。

以上が物語序盤の梗概である。多くの〈皿屋敷もの〉において、皿
の紛失は後半のお菊殺しと関連づけて描かれるのに対し、本作ではす
でに一枚欠けているという前提で始まる。おそらく、小枝繁は殺害さ
れた女順礼の怨霊が、陰に陽に関与し続け、陶六親子や弾正に災いを
もたらす、という構造を軸に展開させるべく、その因縁としての妊婦
殺害を描こうとしたのであろう。この構造は、田中（注21）が指摘す
るように、全体を統括するための構成原理を設けるという、小枝繁が
京伝・馬琴より学んだ小説作法と言えよう。では、弾正の依頼による
皿の焼き直しと、「腹籠りの子の血」を得るための妊婦殺害は、いか
なる作品から抽出されたものか。これは、先述した『けいせい鏡台山』
に加え、浄瑠璃『奥州安達原』^{（おうしゅうあだちがはら）}（近松半二ほか、宝暦十二年九月初演）
に拠るものと思われる。

まず、弾正が陶六に皿の焼き直しを依頼する部分は、『けいせい鏡
台山』第一番目三建目「二條館の場」で、高階弾正が焼物師藤兵衛に
毒入りの唐絵の皿の製造を依頼する場面を取り入れている。

我れ思ひ立つ仔細あつて、青山兵庫之助と心を合せ、謀略用意の
毒薬。人の心の付かざるやうに、器物へ焼き込み用ひんと、思ふ
に幸ひ汝が職分、東山義政公より、青山が拝領いたせしところの
唐絵の皿を、一揃ひ似せて製しけれなば、事成就全き後は、武士

に取立て、あの松ヶ枝も弾正が、仲人なして汝の女房^{（おんな）}。

内容面に加えて、依頼する人物の名が類似している（高階弾正と於佐
下部弾正）。また、傍線で示したように、高階弾正は青山兵庫之助と
結託して陰謀を企てていることから、両者の関係は『播州皿屋舗』の
鉄山と宗全との関係に近い。ただ、『皿之訊続』において於佐下部弾
正が手を組むのは、後述する大田垣大炊介である。ところで、『けい
せい鏡台山』は、安永頃に旗本森半左衛門家の女中小夜が御家横領
を企てた事件^{（お）}を歌舞伎化したものだが、実際は『播州皿屋舗』と「愛
護若」の世界を綯い交ぜにしている。小枝繁は『神猿伝』^{（しんえんでん）}（文化五、六
年刊）において、すでに「愛護若」説話を利用しており（注23）「小枝
繁演劇依拠読本の諸相」、早い段階で本作を承知していた可能性があ
る。

つぎに「腹籠りの子の血」を得るための妊婦殺害についてだが、こ
れは『奥州安達原』四段目「一つ家の段」において、安倍兄弟の母岩
手が身重の恋絹を殺害し、妙薬に必要な胎児の血を得る、という場面
を取り入れたものである。この趣向は、当時の戯作者にとつて馴染み
深いもので、読本や合巻などでたびたび用いられている^{（お）}。

続いて中盤以降の展開を確認する。則政の娘桂姫は、左近の息子八
重之介のことを想う余り病に臥す。それを憂えた則政は、気晴らしに
花見の宴を催す。一方、おさくに一目惚れした弾正だったが、自分に
靡かないことに腹を立て、宴の場で八重之介と囁き合っている様子を
目撃し、「不義は御家の法度なるを、知りつ、不義をなす横道者」（14

ウ15オ）と言いつて立てる。ところが、おさくに送った自身の恋文が証拠となり、不義が露見してしまう。弾正は八重之介への遺恨から左近を殺害し、宝蔵から皿を盗んで逃走、かつて山名家に仕えていた大田垣大炊介の傘下に加わる。大炊介は赤松家を滅ぼすべく、則政が將軍擁立の軍用金を得るために皿を売り払ったと義政に讒言、則政は蟄居を命じられる。おさくは桂姫を連れて実家に戻っていたが、都への路銀を得るため、大炊介の屋敷で奉公する。弾正は再びおさくに言い寄るも拒まれたため、腹いせに十枚のうち一枚の皿を割り、彼女に罪を被せたうえで、十本の指を一本ずつ切り落として殺害する。

如上の展開において重要なのは、弾正が大炊介の傘下に加わることで、おさくに恋慕するも嫌われ、意趣返しに指を一本ずつ切り落として殺害することである。この二点は、『播陽万宝智恵袋』巻之四十所収の「竹叟夜話」に加えて、『酬寇播州皿屋敷』に拠るものと思われる。

まずは「竹叟夜話」の内容から確認する。山名家の家老大田垣主馬助には花野という妾がいた。当家に入入りしていた笠寺新右衛門は色好みで、花野に思いを寄せて何度も恋文を送っていたが、主人への奉公ゆえと断られる。それを恨んだ新右衛門は、大田垣家の重宝「鮑貝の盃」を一枚隠し置き、犯人を花野に仕立てあげる。これを知った主馬助は、折檻したうえで殺害する。

以上を整理すると、弾正にあたる笠寺新右衛門が大田垣の家に出入りしている点、おさくにあたる花野に思いを寄せるも拒まれる点、意趣返しに殺害する点において共通していることがわかる。ただ、指を

一本ずつ切り落とすことについては、先述した『彩入御伽草』を利用したとも考えられるが、恋の意趣返しにお菊を殺すというプロットを持つ『酬寇播州皿屋敷』を取り入れた可能性が高い。

本作は、お菊が高坂甚内の養女であるという設定から、『皿屋敷辨疑録』を軸に構成したものである。また、「まさき」という女性が登場することから、『播州皿屋敷』も参照していたものと思われる。

赤松家に仕えるお菊は石堂庄三郎と恋仲だが、主君の左衛門に言い寄られて困惑する。左衛門の妻まさきも庄三郎に思いを寄せている。この状況を察知した伯父の山名鉄山は、赤松家を横領すべく、まさきと申し合わせて悪計を企てる。それは、「南蛮国製作の皿」⁽³⁰⁾の一枚をあらかじめ割っておき、お菊の仕業として殺害するというものであった。その際、左衛門はお菊の指を毎日一本ずつ切り落とす。

情なくも縛り、庭の立木に絞め上、さまざまと責めけれども、もとより知らぬ事なれば、さまざまに陳じければ、ついに井の内へ吊るし、手の指を毎日く一本づ、切りけるは、おそろしななどいふばかりなし。(8ウ9オ)

このように、『皿之訳統』の当該場面は『酬寇播州皿屋敷』に依拠していると考えられる。ただ、お菊により強い恨みを抱き、悪事を推し進めるのは左衛門ではなく、その妻まさきである。まさきは「心奸しく嫉妬の念深きが上、慈悲心なき」(6オ)性格で、興味を惹かれる人物ではあるが、『皿之訳統』では採用されなかったようである。

さて、八重之介は弾正の行方を探して都へ向かう途中、大江山の麓

にある観音堂で雨宿りをしていたが、正面の梁上に「君子」と書かれた額が掛けられていた。その真意を「盗人」と理解した八重之介は、柱に「夫人不可不自勉」と書き付ける。その様子を見ていた男が、八重之介を緑林斎という盗賊の首領と対面させる。緑林斎は赤松なをのりの旧臣で、主君の娘曙姫との結婚を条件に、八重之介に助力することを約束する。

この展開は、先述した『今古奇観』巻十六「李沂公窮邸遇俠客」の冒頭、長安の房徳が雲華禪寺で鳥の絵に頭を描き足し、それを見ていた盗賊たちが、鳥の頭を描いたあなたこそリーダーに相応しいとして、彼を盗賊の首領へと祭り上げるといふ部分と類似している。本話は当時訓訳が存在せず、白話小説の語彙・語法に通じていなければ読みこなすことは難しいが、小枝繁は『絵本壁落穂』において、『金石縁全伝』⁽³²⁾という長編白話小説を翻案した経験があるため、本話を読みこなすことは可能であろうと思われる。

物語終盤、八重之助は弾正・大炊介を討ち果たした後、桂姫と曙姫の二人を妻に迎える。主人公が二人の女性を妻に持つという結末については、先述した『皿屋敷物語』で雲井之介が篤姫・高窓を妻妾としたことと共通している。また、桂姫がなをのりの娘で、曙姫の姉ということが明らかになるため、八重之介は姉妹を妻に持ったことになる。同年に刊行された『今昔八丈揃』においても、才三郎が姉妹である二人のお駒を妻妾としているため、京伝との間で何らかの趣向の共有がなされていたのかもしれない。

本章では、於佐下部弾正の人物造型を中心に〈皿屋敷もの〉作品との関連について考察してきた。於佐下部弾正は『けいせい鏡台山』の高階弾正をそのモデルとしつつも、細かな性格描写においては「竹叟夜話」の笠寺新右衛門や『酬冠播州皿屋敷』の赤松左衛門などに基づいて造型されている。また、『播州皿屋敷』『皿屋敷物語』と異なり、弾正は御家横領の野望を抱いているわけではない。陰謀を企てるのは、あくまで大炊介であって、弾正はそれに与しているだけである。そう考えれば、弾正の性格や行動は、どこか滑稽な印象を受ける。例えば、皿が収蔵された宝蔵から女の泣き声するということをうけて、自信ありげに見回りに行く場面では、女順礼の幽霊を切ろうとするも、「切つても切れぬ怨霊に、肝も消へ心も疲れ、木の根に躓き、かばと倒れて息絶へける」(11ウ12オ)といった有様である。また、その様子を八重之介に見られた際には、「かやうなる湿地に長居せしゆへにや、持病の癪気起こり、かく気絶はしたり」(12ウ13オ)と、言い訳めいた台詞を語っている。このように、『皿之訳続』の弾正からは、従来の青山鉄山にはない、新たな一面が読み取れるのである。

四 曲亭馬琴『皿屋敷浮名染著』

馬琴と〈皿屋敷もの〉といえば、読本『盆石皿山記』⁽³³⁾(文化三、四年刊、以下『皿山記』)がよく知られている。本作は、明德の乱を時代背景としつつ、荻萱伝説、紅皿欠皿、皿々山などの諸伝承を付会し、

木村源七が殺した臙くろの怨霊の発生・消滅をめぐる因果で構成している。⁽³⁴⁾
 〈皿屋敷もの〉を取り入れた場面は二つある。一つ目は第五「十枚の皿」。ここでは、広岡兵衛に仕える欠皿が家宝の皿を一枚割ってしまったが、下僕の勇蔵が「一枚砕て殺さるゝも、十枚砕て命をとらるゝも、その罪はひとつ也」⁽³⁵⁾と言って、残りの皿をすべて割ってしまった。兵衛の怒りを買った二人は井戸に投身、欠皿の幽霊が毎夜皿を数えるという。ところが、「先祖の掟」(皿を割れば死罪となる)に疑問を抱き、勇蔵の義勇に感じた兵衛によって、二人は命を救われていた。高木元(36)によれば、これは『閑田耕筆』巻二(伴蒿蹊、寛政十一年刊)所収の類話に基づくという。二つ目は第八「因果の鑑」。ここでも、欠皿の異母妹である紅皿が、密通相手の久米鉄平によって、井戸に突き落とされる場面がある。しかし、紅皿が欠皿のように命を救われることはなかった。それは、紅皿の母落穂(源七の妾)が、嫉妬心から晩稲(源七の本妻)を井戸に突き落としたことに対する報いで、「因果觀面の道理」であるという。このように、馬琴は〈皿屋敷もの〉における井戸への投身を、彼一流の因果応報觀に基づいて変容させたのである。

以上を踏まえ、合巻『皿屋敷浮名染者』(以下、『浮名染者』)について検討する。本作は文化十一年に鶴屋喜右衛門から刊行された作品で、前後編計三十丁から成る。天理大学附属天理図書館所蔵の自筆稿本によれば、文化九年二月中旬から起筆し、同年八月五日に擲筆したようである。⁽³⁷⁾よって、版本序文に記された「文化壬申年二月中旬稿」は、正確には起筆日とすべきであろう。通常ならば、翌十年正月に刊

行されるところであるが、何らかの事情により一年遅れてしまったようである。⁽³⁸⁾播本眞一が「皿屋敷物の系譜に連なるものの、その世界の一部を借りるだけで、全く別種の仕組みを持つ」と指摘するように、本作は書名に「皿屋敷」を冠していながら、〈皿屋敷もの〉とは異なる筋立てとしている。この点について、本多朱里(注37)は、

従来のように御家騒動をからめることなく敵討を主題とした点、盗賊・鉄山と奸婦・雄波が実の娘を殺すという形にした点、井戸に現れた霊が怨みを述べるのではなく、両親の一夜の命と主の命を救ってほしいと願う孝女に描いた点に新味がある。

と述べている。筆者も両者の見解に賛同の立場だが、ここでは鉄東太と雄波の性質を評して付された「盗賊」「奸婦」という表現に注目したい。結論から先に述べれば、これらの性質は『皿山記』と『皿之訳続』に基づくものだと思う。以下、雄波と鉄東太の人物造型について、具体的にみていくこととする。

まずは雄波について。『皿山記』は、紅皿欠皿伝説に基づき、同名の二人の姉妹を登場させるのだが、妹の紅皿を悪女とし、その原因を母落穂の悪性に求めている。『浮名染者』にも、雌波・雄波という類似した名前の姉妹が登場し、妹の雄波に悪性が賦与されている。

童野の百姓瘦田の四五郎は、姉妹を連れて鎌倉へ向かうが、途中で雌波は人買いに拐かされ、四五郎も鎌倉で病死。雄波は町人金形喜平五に拾われる。その後、雌波は大磯の遊女満潮となり、赤松家の家臣野村戸四郎と契りを重ねるが病死。一方、雄波は更科鉄東太が喜平

五一家を皆殺しにして金品を盗んだ際、彼と渋々枕を交わし、白牡丹の皿を預かる。鉄東太の子を産んだ雄波は、悪人の子を育てることを疎んで、赤子と皿を置いて身を投げるが、戸四郎に命を救われる。戸四郎は満潮と瓜二つの雄波に惹かれて妻とする。主君の命で十枚ある内の欠けていた一枚の皿を探索する戸四郎は、堺の郷侍与野多太郎（父庄司を殺害した鉄東太の行方を追う）と出会い、皿と養女おきそを預かる。雄波はおきそを妬んで酷使する。ある日、戸四郎から皿の番を頼まれるが、それは赤子とともに捨て置いたものであった。また、家臣に取り立てられた鉄山が、かつて枕を交わした男だとわかる。それを立ち聞きしていたおきその泣き声に驚き、思わず皿を割ってしまったが、鉄東太の言葉にしたがい、おきそを井戸へ突き落す。皿を割った罪で捕縛された戸四郎を尻目に、雄波は鉄東太と酒宴に興じる。その後、おきそが自分の娘であることを知り、先非を悔いて自害する。

『播州皿屋舗』のお菊殺しと同様、おきそは秘密を立ち聞きた答によって殺害されるのだが、その背景には雄波による嫉妬の情があった。嫉妬深い性格は、『酬寇播州皿屋敷』のまさき、『皿屋舗辨疑録』の内室と類似しているが、井戸に突き落とす点、戸四郎という夫がいるながら鉄東太と密通する点から鑑みて、『皿山記』の落穂・紅皿を踏まえた人物造型となっている。ただ、善女と思われた雄波が、おきそを妬むあまりに悪女と化すという展開には、少々違和感を覚える。というのも、紅皿と違って雄波の肉親に悪人はおらず、受け継ぐべき悪性も存在しないからである。であれば、雄波の因果を規定するものは

何か。それは、物語冒頭で語られる「多福の巫女」の予言である。「人の吉凶禍福を言ふこと掌を指すがごとく」（3ウ4オ）と評判の多福の巫女は、四五郎に対して「此度鎌倉へ赴き給ふこと甚だ悪し。もし、押して彼処へ行かんとせば、後悔そこに立ち難し」（同）という予言を示すが、彼はそれを拒んだために落命。予言は娘二人にも影響を及ぼし、とりわけ雄波の人生に暗い影を落としている。梗概で示したように、運命に翻弄される雄波ではあるが、その判断や行動に問題がなかったわけではない。例えば、鉄東太に襲われた際には、「否まば命取らるべしと思ふばかりに、泣く／＼もおめ／＼と身を任せ」（8ウ9オ）とあるように、命惜しさに体を許して悪人の子を儲ける。^①また、戸四郎には鉄東太との関係を隠したうえで、「何となく色から仕掛けて戸四郎を誘ふ」（11ウ12オ）とあり、自ら関係を迫つてもいる。馬琴流の勸善懲惡観^②からすれば、詰め甘さが目立ってしまうところではあるが、その分、魅力的な女性に映ることも事実である。

つぎに鉄山について。（皿屋敷もの）において、鉄山が御家横領を企てる人物であることは、繰り返し述べてきた通りである。しかし、馬琴は『皿山記』『浮名染著』の二作品を通して、それとは異なる性質の人物へと改変している。

『皿山記』の鉄平は錦織卯三二の従弟。卯三二の妾となった紅皿との密通が発覚したために殺害を図るが、誤って広岡兵衛を殺害してしまふ。その後、紅皿を疎んで井戸へ突き落とし、さらには卯三二夫婦をも殺害するが、最後は欠皿・勇蔵に討たれる。このように、鉄平は殺

人を繰り返す悪人として描かれるわけだが、これは彼の姓である「久米」が関係する(注34)。久米姓といえば、『皿屋舗辨疑録』に登場する「久米平内」が知られる。平内は青山主膳の命により罪人を処刑する首切り役人で、「人を殺すことを何とも思はざる不敵者」であつた。馬琴は、その冷酷とも言える悪性に魅力を感じ、鉄平のモデルとしたのではないだろうか。そのせいか、鉄平は肝心の皿には一切関与しない。もっと言えば、〈皿屋敷もの〉における鉄山の役回りのうち、彼に与えられたのは、紅皿を井戸へ突き落すことのみである。先述したように、本作は贗の怨霊の発生・消滅をめぐる因果を全体の枠組として設定し、そこに複数の伝承を集めて付会していく方法を探る。皿屋敷の伝承も、下女が皿を割る部分と、女性を殺害して井戸に落とす部分を一度解体し、それらを別個の場面として再構成しているが、そこには鉄平の人物造型も深く関わっているものと思われる。

一方『浮名染著』の鉄東太は、与野庄司を殺害して白牡丹の皿を奪う盗賊として登場、皿を盗んでは数多くの手下を従えて、金銀財宝を奪い取る。その後、赤松家に仕官して雄波と密通、皿を割った罪をおきそに被せて、彼女を井戸へ突き落すが、最後は多太郎に討たれる。本作は『皿山記』と同様、敵討の構造を有しつつ、お菊殺しの筋立てが用いられるのだが、鉄東太を盗賊としたところに新しさがある。ただ、このような人物造型は、先述した『皿之訳続』の於佐下部弾正と重なる。弾正・鉄東太の行動からプロットを抽出すると、①皿を盗む(奪う) ②皿を警固(所持)する人物を殺害する③殺害した人物の

息子によって討たれる、の三点で共通する。このことから、馬琴は鉄東太を盗賊として描くに際して、『皿之訳続』の弾正をモデルとしたのであろう。また、鉄東太の姓「更科」は、『けいせい鏡台山』に登場する弾正の姓「高階」と音が似通う。となれば、馬琴は『けいせい鏡台山』をも参照していた可能性も考えられる。そこで、試みに『浮名染著』と『けいせい鏡台山』を読み比べてみると、意図的に皿を割る行為が見られる点で共通していることがわかった。

『けいせい鏡台山』第一番目五建目「青山館の場」で、毒入りの皿の存在を疑われた青山兵庫は、お菊に皿の「毒味」を求める。対してお菊は、「もう、是非がない」と言って皿を割るのであつた。一方『浮名染著』では、戸四郎を救うべくやって来た多太郎から「瀬戸物は損じ易く忠臣は家に稀なり」(28ウ29オ)と諷められた赤松殿が皿をすべて打ち砕き、「我この皿を秘蔵して、咎なき戸四郎を殺さんとせしは、大なる誤りなり」(29ウ30オ)と言って戸四郎の罪を許す。ただ、内容から鑑みて、『浮名染著』が依拠したのは『皿山記』でも用いた『閑田耕筆』であろう。『けいせい鏡台山』は、本作を執筆する過程で見出した文献ではあつたが、直接の典拠ではなかったようである。

以上、本章では『浮名染著』の人物造型について考察し、雄波は『皿山記』の落穂・紅皿を、鉄東太は『皿之訳続』の於佐下部弾正を、それぞれモデルとしていることがわかった。また、鉄東太は御家横領の陰謀を企てないという点において、『皿山記』の鉄平と共通している。このように、『浮名染著』には『皿山記』の執筆経験を生かした作品

づくりが見て取れるが、それは『皿山記』に見られた「客皿の十人前や白牡丹」という馬琴自詠の発句が記載され、句中の「白牡丹」が中国渡来の「珍器」として採用されることから窺える。一方で、先行研究の指摘通り、本作は『播州皿屋舗』などの〈皿屋敷もの〉作品を直接の典拠とすることはほとんどなく、その点に関して異論はない。しかし、秘密の立ち聞き、妻の嫉妬、意図的に皿を割る行為など、〈皿屋敷もの〉における類型的な描写は遵守されているのではないか。馬琴は『浮名染著』を著述するに際し、先行する〈皿屋敷もの〉を十分に咀嚼したうえで、本筋である敵討の構造へと落とし込んだのである。

おわりに

本稿では、『播州皿屋舗』などの〈皿屋敷もの〉に依拠する短編合巻三作を対象に、青山鉄山の人物造型を中心とする比較研究をおこなった。『皿屋敷物語』は『播州皿屋舗』の筋に拠りつつも、久米山鉄山と闇九郎を造型するに際しては、『彩入御伽草』『花系図都鑑』『阿漕浦三巴』などの諸文献をもとに、原作からの改変がなされている。とくに、闇九郎の「もどり」は『阿漕浦三巴』の弥太七に前例があり、『今昔八丈揃』に登場する才三坊の人物像にも影響を与えている可能性が考えられる。続く『皿之訳続』では、於佐下部弾正の人物造型を中心に考察した。於佐下部弾正は『けいせい鏡台山』の高階弾正をモデルとしつつも、「竹叟夜話」の笠寺新右衛門や『酬寇播州皿屋敷』

の赤松左衛門などの性格描写を取り入れて造型されている。また、悪人ながらも滑稽味のあるキャラクターとして描かれており、〈皿屋敷もの〉に見られる冷酷な印象は影を潜めている。そして、『浮名染著』については、雄波・鉄東太の人物造型について考察した。雄波は自身の先行作『皿山記』の落穂・紅皿をモデルとし、その悪女像を継承する形をとった。また、鉄東太は『皿之訳続』の於佐下部弾正をモデルとするが、皿の紛失、殺害、仇討成就といった、敵討の構造においても共通点する。その一方で、特定の〈皿屋敷もの〉作品に依拠するのではなく、その類型的な描写を抽出し、作品内に落とし込むといった工夫も窺えた。

以上を踏まえ、京伝・小枝繁・馬琴の著述姿勢について考えたい。先述したように、『皿屋敷物語』は『播州皿屋舗』の筋を基本線としており、そこから大きく逸脱することはないが、二人の敵役を改変することで、物語に大きな変化が生まれている。とりわけ、闇九郎の「もどり」は劇的な効果を発揮している。原作の弥太七は皿を盗んだ悪人ではあるが、いわば小悪党で、その最期もあつけないものである（園右衛門に斬られて死ぬ）。おそらく、この部分に違和感を感じたであろう京伝は、先行する『阿漕浦三巴』の弥太七をもとに、闇九郎を改心させた。それによって、作品内の敵役を鉄山一人へと収斂させたのである。鉄山を悪党の首領としたのもそのためであろう。一方『皿之訳続』は、女順礼の怨霊の発生・消滅が全編を統括する枠組となっている。よって、『皿屋敷物語』のように『播州皿屋舗』の筋を軸と

するのではなく、自ら設定した枠組を基に、いくつかの作品から抽出した〈皿屋敷もの〉の要素を肉付けして物語を構成しているのである。弾正を女順札の怨霊に翻弄される滑稽味のある人物としたのも、そのためであろう。これは、馬琴の『皿山記』の方法に近い。『皿山記』でも、源七の殺した麿の怨霊が、その妻や娘にとりつき、一家に災いをもたらすのだが、寂霊和尚の祈禱によって消滅する。馬琴の読本作法を学んだ小枝繁であつてみれば、『皿之訳統』は『皿山記』の方法を意識的に取り入れた可能性も考えられる。『浮名染著』もこの方法に近いが、因果の理を強調する点において異なる。本作は、合巻『浪葩桂夕潮』⁽⁵⁾（文化九年刊）と同様、倒叙形式の構成を採用した作品である。すなわち、冒頭に物語の原因と結果を示し、順次その詳細を語るといふもので、本作では多福の巫女の予言が物語の展開・結末を規定している。この方法は文化九年前後の作品にのみ見られるが、『美濃旧衣八丈綺談』では、より緻密な因果応報観によって物語を構成している。また、〈皿屋敷もの〉の利用という点でいえば、馬琴は特定の作品に依拠するのではなく、諸要素を抽出して落とし込む方法を採用しており、京伝や小枝繁とは異なる姿勢が窺える。

このように、〈皿屋敷もの〉を共通のテーマとする合巻作品を比較することによって、三者の著述姿勢を浮き彫りにすることができた。演劇との関連が指摘されて久しい合巻ではあるが、究明すべき点は数多く残されている。本稿で得た結論も、演劇利用の一端を明らかにしたに過ぎない。引き続き、京伝・馬琴を中心に考察を進めていきたい。

注

- 1 拙稿「京伝・馬琴の演劇利用——『恋娘昔八丈』を典拠とする作品をめぐる——」（『日本文学』69-18、二〇二〇年）、同「京伝・馬琴・一九と『糸桜本町育』」（『奈良大学大学院研究年報』28、二〇二三年）。
- 2 大屋多詠子「馬琴の演劇観と『勸善懲惡』」（『馬琴と演劇』花鳥社、二〇一九年）。
- 3 拙稿「〈巷談もの〉における主人公公像の変容」（『馬琴読本の様式』清文堂出版、二〇一五年）。
- 4 塚田千恵美「恋娘昔八丈」（『浄瑠璃作品要説〈7〉江戸作者篇』国立劇場芸能調査室、一九九三年）。
- 5 菱岡憲司「馬琴読本における「もとどり」典拠考」（『読本研究新集 第五集』翰林書房、二〇〇四年）。
- 6 板坂則子「楚満人と馬琴——草双紙におけるヒロイン像の変遷」（『曲亭馬琴の世界——戯作とその周縁』笠間書院、二〇一〇年）。
- 7 近世期に流布していた〈皿屋敷もの〉の分類と変遷については、越智治雄「皿屋敷の末流」（『明治大正の劇文学——日本近代戯曲史への試み——』塙書房、一九七一年）、諏訪春雄「皿屋敷流転」（『国文学解釈と教材の研究』19-19、一九七四年）、小田誠二「実録体小説の原像——『皿屋舗辨疑録』をめぐる——」（『日本文学』36-12、一九八七年）、森山重雄「皿屋敷の系譜と『彩入御伽草』」（『江戸文学』6、一九九一年）、同「皿屋敷の系譜

- と「彩入御伽草(統)」(『江戸文学』7、同年)、横山泰子ほか「〈江戸怪談を読む〉皿屋敷―幽霊お菊と皿と井戸」(白澤社、二〇一五年)などに詳しい。
- 8 向井芳樹校訂代表『叢書江戸文庫① 豊竹座浄瑠璃集「二」』(国書刊行会、一九九〇年)。「播州皿屋舗」の校訂および解題は早川久美子執筆。以下、本文の引用は同書による(文字譜は省略)。
- 9 山東京傳全集編集委員会編『山東京傳全集 第九卷』(ベリかん社、二〇〇六年)。以下、本文の引用は同書による。
- 10 理由は不明だが、文化七〜九年に〈小三金五郎もの〉の読本・合巻が統出している。ちなみに、注1拙稿で指摘したように、『今昔八丈揃』は〈お駒才三もの〉と〈小三金五郎もの〉を綯い交ぜにした作品だが、前年正月に江戸中村座で上演された歌舞伎『東都名物錦絵始』も同様の構造を持つ(黒澤暁「江戸における小三金五郎物の変容」『国文学』102、二〇一八年)。
- 11 注7越智論文。所謂「菊字法度」については、鈴木重三「校合本は語る―「おさく」と「おさく」―」(『書誌学月報』38、一九八八年)に詳しい。
- 12 国立音楽大学附属図書館所蔵の初演時の辻番付(kunTK55-000755-0007)には、「こし元おりく」と記されている。
- 13 京伝は読本『桜姫全伝曙草紙』(文化二年刊)で、悪党蝦蟇丸の仲間の印として「尾長の蝦蟇」を用いたことがある。
- 14 水野稔「京伝合巻の研究序説」(『江戸小説論叢』中央公論社、一九七四年)。
- 15 郡司正勝「解説」(『鶴屋南北全集 第一巻』三一書房、一九七一年)に
- よれば、この趣向は京伝読本『安積沼』(享和三年刊)に拠るものだという。
- 16 元興寺赤右衛門は、元文五年二月に江戸市村座で上演された歌舞伎『姿観隅田川』に登場する面打の名。『中古戯場説』(計魯里観主人、文化二年成か)に詳しい内容が記されているが、本作との内容上の共通点は見当たらない。『役者懐中暦』江戸之巻(元文六年正月刊)によれば、二代目市川團十郎が演じた赤右衛門は大大当りであったようで、本作の赤右衛門も団十郎の似顔絵として描かれているものと思われる。なお、京伝は団十郎の日記『老のたのしみ』を享和二年に書写したことが知られている。
- 17 高橋明彦「テキストの作者―『阿漕浦三巴』における非多田南嶺論―」(『人文学報』262、一九九五年)。
- 18 八坂祐子「皿屋敷ものにおける御家騒動の意味」(『香椎潟』43、一九九八年)。
- 19 八文字屋本研究会編『八文字屋本全集 第十七巻』(汲古書院、一九九八年)。
- 20 鈴木重三・徳田武編『馬琴中編読本集成 第十二巻』(汲古書院、二〇〇二年)。この点に関しては、大屋多詠子「馬琴と忠臣蔵」(注2)に詳しい。
- 21 田中則雄「後期読本作者小枝繁の位置」(『読本論考』汲古書院、二〇一九年)。
- 22 横山邦治「読本の研究」第四節「伝説ものの諸相」(風間書房、一九七四年)。
- 23 注21前掲論文、「小枝繁の読本と『歴史』」(『享和・文化初期読本の基礎

- 的研究」西日本近世小説研究会、二〇二〇年）、「読本における史伝と戯曲―小枝繁『催馬楽奇談』をめぐる―」（『国語と国文学』97-11、同年）、「小枝繁演劇依拠読本の諸相」（『読本研究新集』12、二〇二一年）。
- 24 慶応義塾大学図書館本（2020.08.01）、東北大学附属図書館狩野文庫本（4.12775-1）。引用に際しては、仮名書きの語句を漢字に置き換え、適宜、句読点・記号を補った。
- 25 本文では「則政」「まさのり」の二通りの表記がなされるが、筆者があえて漢字で表記していることから、本稿では「則政」に統一する。
- 26 渥美清太郎編『日本戯曲全集 第十巻』（春陽堂、一九三〇年）。引用に際しては、旧字体を新字体に改めた。
- 27 当該事件に関する実録は『安永森鏡』『安永森鑑邪正録』などの名で伝わる（菊池庸介「主要実録書名一覧稿」『近世実録の研究―成長と展開―』汲古書院、二〇〇八年）。
- 28 筆者は以前、「血合わせ」再考―京伝・馬琴の諸作品をめぐる―」（『読本研究新集』13、二〇二二年）にて、京伝と馬琴の読本・合巻における同趣向の利用について検討した。
- 29 八木哲浩校訂『播陽万宝智恵袋 下巻』（臨川書店、一九八八年）。
- 30 早稲田大学図書館本（〈1301961-0157〉）。
- 31 まさきの性格は、『皿屋舗辨疑録』に登場する青山主膳の内室と重なる。
- 32 後藤丹治「読本三種考証」（『学大国文』6、一九六二年）は、式亭三馬が読本『阿古義物語』（文化七年刊）を著述するに際し、本話を自力で読みこなしたことを指摘している。
- 33 徳田武「金石縁全伝」と馬琴・小枝繁」（『日本近世小説と中国小説』青裳堂書店、一九八七年）。
- 34 湯浅佳子「盆石皿山記」小考」（『近世小説の研究―啓蒙的文芸の展開―』汲古書院、二〇一七年）。
- 35 国立国会図書館本（2008.161）。
- 36 高木元「中本型読本の展開」（『江戸読本の研究―十九世小説様式攷―』ペリカン社、一九九五年）。
- 37 本多朱里「解題」（『京都大学蔵 頼原文庫選集 第七巻』（臨川書店、二〇一八年）。本文の引用も同書に拠る。
- 38 文化十年正月十六日付歌川豊清宛書簡に「入り口うすゝみ入之処、少々愚意二かなひ申さず候二付、又々御面倒奉願候」「彼是とひとまり候内、うり出しも大き二延引可致」とある。これは挿絵に関する問題による刊行の遅延を伝えるものだが、豊清が携わった馬琴著作は前年刊の『糸桜春蝶奇縁』のみであるため、本書簡は該書に関するものと推測される。とすれば、『浮名染著』の刊行遅延は、右のような事情が背景にあった可能性が考えられる。書簡の引用は、柴田光彦・神田正行編『馬琴書翰集成 第一巻』（八木書店、二〇〇二年）に拠る。
- 39 播本真一ほか「早稲田大学図書館所蔵合巻集覧稿 二十二」（『近世文芸研究と評論』56、一九九九年）。
- 40 他作品の青山鉄山・久米山鉄山などと区別できないため、本稿では元の名前である「鉄東太」で統一する。
- 41 文化九年刊の馬琴合巻『千葉館世継雑談』でも、原蔵人の娘あだしのが

悪臣幕割治部之進の妻となつて、一子堂次郎を儲けるという類似した展開となっている。ただ、あだしの場合、治部之進が父の敵だと知るや、息子とともに自害している。

42 馬琴は善人と悪人を明確に区別する〈善人／悪人〉型にこだわった読本づくりを目指していた（大高洋司「京伝、馬琴と〈勧善懲悪〉」『京伝と馬琴』翰林書房、二〇一〇年）。

43 河竹繁俊編『近世実録全書 第一巻』（早稲田大学出版部、一九二九年）。

44 『皿屋敷物語』の久米山鉄山も「久米」を冠するが、久米平内との類似は見られない。

45 播本真一「浪葩桂夕潮」〔『早稲田大学所蔵合巻集覧 中』（青裳堂書店、二〇一三年）〕。

【付記】 本稿はJSPS科研費（若手研究 課題番号：18K12301）における成果の一部である。

Abstract

Banshu-Sarayashiki and the short *Gokan*

Kazunori NAKAO

This article presents a comparative study of the short *Gokan* based on ‘*Sarayashikimono*’ such as the Joruri *Banshu-Sarayashiki* (written by Tamenaga-Tarobee and Asada-itcho, first performed in June 1741) focusing on the character molding of Aoyama-Tetsuzan. The works adopt in this article is *Banshu-Sarayashiki-Monogatari* (written by Santo-Kyoden, first published in 1811) , *Junimae-Sarano-Yakitsugi* (written by Saeda-Shigeru, first published in 1812) , *Sarayashiki-Ukinano-Sometsuke* (written by Kyokutei-Bakin, first published in 1814). It was confirmed that the difference in the use of ‘*Sarayashikimono*’ in these works affected Tetsuzan’s character molding.

Key words : *Joruri* (ballad drama) , *Gokan* (one type of illustrated novel) , *Sarayashiki* , character molding, device